月光の庭　武田 若千

学生の頃からお世話になっている博士の、今年の誕生日は十五夜だった。三年ぶりの訪問だ。

お祝いにと訪れた彼の家には相変わらず博士以外の姿はなく、お祝いの贈り物も花も、いつもより豪華な食事もなかった。

居間に通され、ソファを勧められる。テーブルに持参したワインとチーズを置いた。

博士がグラスを取りに行っている間に、庭を眺めて驚いた。

殺風景だった庭に、花や木々が植えられている。

十五夜の月はひと際に青白く明るく、闇の中に光を振りまいている。粉のような光は地上に降り注ぎ、綺麗に手を入れた庭をぼんやりと浮かび上がらせて、とても幻想的に見えた。

グラスを手に戻ってきた博士は、庭に面した広い窓のロールスクリーンを全部下ろしてしまう。照れ隠しのようにも見えた。庭景色は遮られ、月光だけが白いスクリーンにぼんやり映っている。

思わず、折角綺麗な庭なのにと呟くと、博士は微かに首を振り、笑っただけだった。

二人でワインを開け、博士の誕生日に乾杯をし、他愛のない近況などを語り合っていると、突然ロールスクリーンに影が差した。

小柄な影は、博士の座っているあたりに差している。

軽くウェーブした長い髪、ほっそりとした横顔は、どうやら女の人のようだ。博士は最近庭に植えた花のことを話していて影には気づいていない様子だ。昔は花になど興味はなかったように思う。

博士、庭に誰か居るようです。

そう言うと博士は喋るのをやめて窓の方を見る。すぐにロールスクリーンを上げて様子を窺うものと思ったら、博士は嬉しそうに大きく頷いて、座ったまま動こうとしない。

◇影女

どなたかみえたのではないのですかと問うと、博士は、いいや、あれはこのままでいいのだと答える。
庭はあれのために手入れをしているから、それで十分なのだと。また嬉しそうに笑う。
席を立って、ロールスクリーンの端をそっとめくるのを、博士は止めなかった。
庭には誰もおらず、ただ月の光が降り注いでいる。
博士を振り返ると、スクリーンに透す影を優しい目で見つめていた。

禁転載